

発 明 文 化 論

〈第 49 回〉

丸山 亮

ドン・ジョヴァンニ

好色な男の代名詞ともなっているドン・ファンは、洋の東西、時代を超えて人気がある。スペインの民話的な人物をもとに劇作家ティルソ・デ・モリーナが 17 世紀に「石の客」を表して以来、フランスでは数十年後、モリエールのドン・ジュアンに受け継がれる。これらを背景に 18 世紀の末、イタリア語によるモーツァルトの傑作オペラ「ドン・ジョヴァンニ」が生まれた。共通するのは女を口説くことを生きがいとする貴族の男が、放蕩を尽くした挙句、自業自得で滅びるといふ筋書きだ。日本では西鶴の「好色一代男」が 17 世紀に書かれているので、世界的に見ても好色文学とその演劇はほぼ同じころ現れたとみていい。

晩秋の休日、創立 60 周年になる二期会が「ドン・ジョヴァンニ」を日生劇場で上演するのを見に出かけた。モーツァルトのオペラでは「フィガロの結婚」や「魔笛」と並んで、この「ドン・ジョヴァンニ」の人気が高い。緻密な劇構成と人間心理を深く描いた点で、有名なアリアは少ないものの作品の出来栄は他の二作に引けを取らない。

「ドン・ジョヴァンニ」を傑作としているのはモーツァルトの音楽はもちろんだが、台本作家ロレンツォ・ダ・ポンテの功績が大きい。ダ・ポンテはほかに「フィガロの結婚」「コジ・ファン・トゥッテ」の台本もモーツァルトに提供していて、二人の緊密な関係は最近、映画「ドン・ジョヴァンニ」の中でも詳しく描かれていた。ダ・ポンテはヴェネチア生まれの改宗したユダヤ人で、キリスト教の聖職にありながら放蕩のあげく、ウィーンへ追放されたり、後年アメリカに渡るなど、価値が大変動する 18 世紀末のヨーロッパを体現した人物だ。こうした台本作家が織りなす戯曲は、当然キリスト教的な道德などによらないで新時代に向かう自由人を造形することになる。他人の原作に基づくとはいえ、フィガロやドン・ジョヴァンニには、彼の世界観が反映していると思われる。

ボーマルシェの原作による「フィガロの結婚」のオペラがウィーンで成功したのを受けて、次にモーツァルトはダ・ポンテとの共同のもと、ドン・ジョヴァンニ作曲の筆を進めた。これにはドン・ファンと並ぶ色事師で名高いカサノヴァもアイデアを提供したといわれる。初演は 1787 年、ウィーンではなくプラハで行われた。

舞台第 1 幕、ドン・ジョヴァンニに犯されそうになったうえ父親を殺されたドンナ・アンナ、その許婚のドン・オッターヴィオ、これも捨てられた女ドンナ・エルヴィーラがドン・ジョヴァンニと鉢合わせする場面。4 人がそれぞれの気持ちを歌う 4 重唱となる。モーツァルトの筆は奇跡のように冴えまくる。そのほか、伝統的なオペラではアリアとアリアをつなぐ語りのようなレチタティーヴォで鍵盤楽器 1 台に合の手を委ねていたものが、ここではかなりの部分がオーケストラの伴奏に格上げされている。劇的な進行と音楽はこうしてより密接となった。

第 2 幕、ドン・ジョヴァンニは従者のレポレルロを相手に食事をとっている。この間流れてくるのは当時の流行歌や、モーツァルト自身の「フィガロ」のアリアの旋律だったりする。当時のおおらかな著作権意識がうかがえよう。

幕切れ近く、ドン・ジョヴァンニに殺されたドンナ・アンナの父親は亡霊となって彼のもとを訪れ、食事に招待する。ドン・ジョヴァンニはひるむことなくその申し出を受けるが、回心の勧めには耳を閉ざし、その亡霊の手に握られて息絶える。自由への意思で生きてきた彼に、回心の余地はない。

己の情欲のおもむくまま、世間の倫理に従わないで破滅していく「東海道四谷怪談」の民谷伊右衛門が現れるのは、その 30 年後だ。世界はほとんど連動している。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)